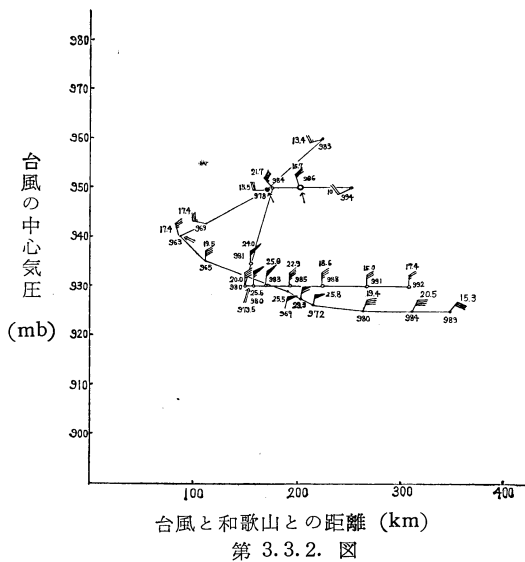


台風と神戸との距離 (km)
第 3.3.1. 図



台風の中心気圧
(mb)
台風と和歌山との距離 (km)
第 3.3.2. 図

第 3.3.1. 図 紀伊半島付近を通った台風による神戸の風速と気圧を台風の中心気圧と台風と神戸との距離から求めた図

○ : 13号台風 (5313) ● : 伊勢湾台風 (5915) / : 最大偏差 ↑ : 最低気圧

第 3.3.2. 図 紀伊半島付近を通った台風による和歌山の風速を台風の中心気圧と台風と和歌山との距離から求めた図 記号は第3.3.1.図と同じ。

れたが、その理論的な説明は行なわれていない、このことについては今後研究を進めたいと考えている。最後にこの報告を作成するにあたっていろいろと御指導をいただいた中野台長、平沢予報課長に深く感謝致します。

参考文献

- 1) 黒沼新一, 1961: 実用的な高潮予報の問題について

て、日本気象学会関西支部月例会ノート、第2巻第4巻、3~10。

- 2) 上野武夫, 1961: 大阪湾高潮の総合調査報告, 気象庁技術報告第11号, 8~17。
- 3) 橋本正義, 1964: 台風の風速分布と波浪について (第2報), 昭和39年度 大阪管区気象研究会, 5月28日~29日。

〔新書紹介〕

「災害論」

佐藤武夫・奥田 穰・高橋 裕共著

総合災害として台風災害がまず取扱われ、次に水害・震災・冷害・大気汚染害・水質汚濁害・地盤沈下害の各災害現象の実体が詳細に分析されている。これらの分析を基にして「災害構造の総括」が述べられている。いわゆる「公害」を「社会制度がつくり出した災害」と規定しているが、台風・異常低温・地震等の自然災害が、この「社会制度がつくり出した災害」によって2重、3重に災害の規模や度合が強まる点が明らかにされている。事実年代が進むにつれ台風による被害は激増しているが、「これは台風の被害は風速あるいは中心示度の深さ、

さらに人口だけが規定するものでないことを示唆しているといえよう」と結んでいる。

このように本書では「気象災害」が災害一般の「素因」として取扱われ、この素因に重なり、また災害が増大する方向にお互に加速し合いながら働く点を示した事は注目すべきであらう。このためある時点でよいと思った災害対策さえも、経済等の急速な発展に伴い、次の時点では逆に災害を増大させる要因として働くことがあるという。

ただ欲を言えば、この素因と社会制度が作り出した災害の相互作用の間に存在すると思われる数理的法則を取り出すような方向の協力がなされてしかるべきであったように思う。かくして災害論が「災害の科学」に成長するのかもしれない。(岡本雅典)